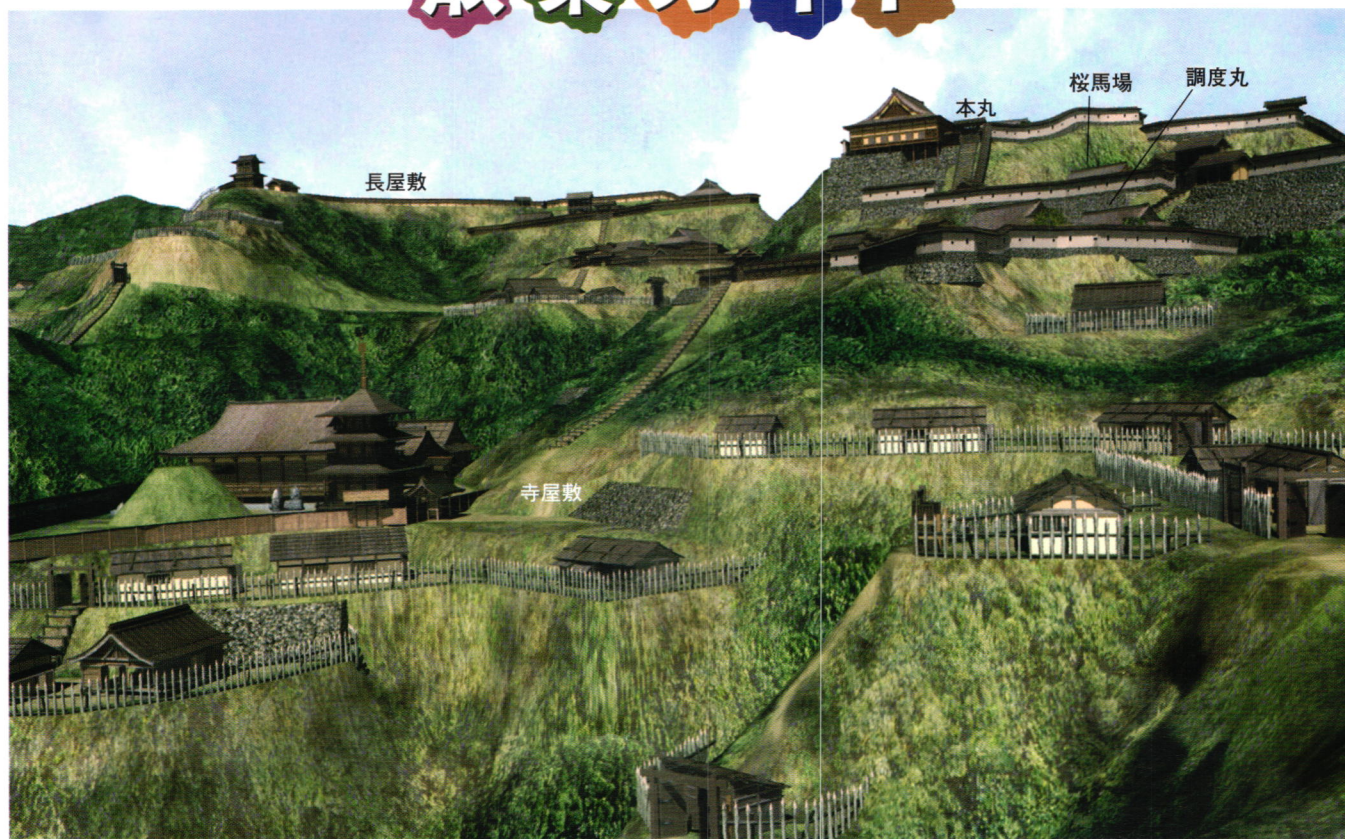


国指定史跡 七尾城跡

The ruins of Nanao castle/ 七尾城遺址

散策ガイド



七尾城中心部 CG 画像



七尾城跡 遠景（北から） — 七尾城跡の範囲

〈指定面積〉 266,189 m²
〈指定年月日〉 昭和 9 年 (1934) 12 月 28 日 国の史跡に指定される (史跡指定地面積 63,674 m²)
平成 23 年 (2011) 2 月 7 日 国の史跡に追加指定される (史跡追加指定地面積 202,495 m²)
〈所在地〉 七尾市古府町竹町古屋敷町入会大塚甲 15 番 1 外 37 筆

七尾城に関する年表

年号 (西暦)	おもな出来事	領主
建武3年 (1336)	足利尊氏が征夷大将軍となり、室町幕府を開く。	畠山満慶
明德2年 (1391)	畠山基国、河内・越中とともに、能登守護となる。	
応永13年 (1406)	畠山基国が没し、次男満慶が家督を継ぐ。	
15年 (1408)	畠山満慶、畠山家の家督を兄の満家に譲り、満家から能登守護を与えられる。能登畠山家 (畠山匠作家) を創設する。	能登畠山
永享4年 (1432)	畠山満慶没し、長男義忠が家督を継ぐ。	
享徳4年 (1455)	この頃、畠山義統が守護となる。祖父の義忠が隠居する。	
応仁元年 (1467)	畠山義統、西軍方で応仁の乱に参戦する。	
文明10年 (1478)	応仁の乱が終わり、この頃、畠山義統、能登に下向する。	
15年 (1483)	畠山義統、府中守護館で連歌会を催し、「賦何船連歌」が詠まれる。	
延徳2年 (1490)	畠山義元、能登に下向する。	
明応6年 (1497)	畠山義統没し、長男義元が家督を継ぐ。	
9年 (1500)	守護代の遊佐統秀ら、義統の次男慶致を守護に擁立する。義元は越後へ逃れる。(明応の政変)	
文亀3年 (1503)	畠山慶致、父義統の七回忌法要を瑞応山大事寺で行う。	
永正5年 (1508)	畠山義元、越後から戻り、再び能登守護となる。	畠山義統
12年 (1515)	畠山義元没し、慶致の長男義総、能登守護となる。	
大永3年 (1522)	七尾の招月庵で「賦何路連歌」が詠まれる。	
5年 (1525)	七尾城内の義総邸で「賦何人連歌」が詠まれる。	
6年 (1526)	畠山義総、七尾城内で歌会を催し、冷泉為広・為和父子、列席する。	
天文8年 (1539)	絵師の長谷川等伯 (信春)、七尾に生まれる。	
13年 (1544)	禅僧の叔叔守仙が「独楽亭記」に七尾城と城下のようすを記す。	
14年 (1545)	畠山義総没し、次男義統が家督を継ぐ。	
16年 (1547)	畠山駿河 (義統の弟) ら、能登に侵入し、重臣の温井総貞らによって鎮圧される。	
19年 (1550)	この頃、能登の内乱 (遊佐統光と温井総貞の対立) によって七尾城下が焼失する。	
20年 (1551)	この頃、重臣七名からなる「畠山七人衆」が領国支配の実権を握る。	畠山義綱
弘治元年 (1555)	この頃、畠山義統の長男義綱が守護となる。隠居した義統は恵祐と号し、義綱の後見人となる。	
永禄9年 (1566)	畠山義統・義綱父子らが、温井紹春を謀殺し、大名権力の回復をはかる。温井一党が一向一揆などの支援を得て、七尾城方と対峙する。(弘治の内乱)	
天正2年 (1574)	重臣らが畠山義綱を追放し、長男義慶を守護に擁立する。	
天正4年 (1576)	畠山義慶、重臣に毒殺され、弟義隆が家督を継ぐ。	
天正5年 (1577)	越後の上杉謙信、能登へ攻め入り、七尾城を囲む。	
天正5年 (1577)	遊佐・三宅・温井氏らが上杉方に内応し、開城に反対する長氏一族を謀殺する。七尾城が落城し、能登畠山氏が滅亡する。上杉方の鯉坂長実が七尾城代となる。	上杉謙信
天正6年 (1578)	上杉謙信、急死する。	
天正7年 (1579)	温井景隆ら鯉坂長実を追放し、七尾城を奪い返す。	
天正9年 (1581)	織田信長、菅屋長頼を七尾城代とし、温井景隆・三宅長盛が石動山へ退き、その後越後へ行く。	
天正10年 (1582)	前田利家、織田信長より能登一国を与えられる。織田信長、菅屋長頼に能登・越中の城割りを命じ、安土へ戻らせる。	
天正10年 (1582)	本能寺の変で織田信長が自害する。温井景隆・三宅長盛ら、越後勢とともに石動山に入るが、前田利家・佐久間盛政らによって滅ぼされる。利家、石動山を焼き討ちする。(石動山・荒山の合戦) この頃から、前田利家が所口の丸山に築城を開始する。	
天正11年 (1583)	前田利家、豊臣秀吉より、石川、河北二郡を与えられ金沢 (尾山) へ移る。前田安勝 (利家の兄) が、七尾城代となる。	
天正12年 (1584)	前田利家、加越国境などで越中の佐々成政と戦う。佐々成政勢が七尾城を包囲する。	
天正13年 (1585)	佐々成政、羽柴秀吉に降伏する。	
天正17年 (1589)	愛宕山の気多本宮や小島・所口の百姓屋敷を明神野に移す。	前田利家
文禄2年 (1593)	前田利家の次男利政、豊臣秀吉より能登一国を与えられる。	
文禄3年 (1594)	前田安勝没する。長男利好が七尾城代となる。	
文禄4年 (1595)	所口の惣構え堀の開削を進める。	
慶長4年 (1599)	前田利家、大坂で没する。	
慶長5年 (1600)	関ヶ原の戦い。前田利政が改易され、利政領は加賀藩領となる。	
慶長8年 (1603)	徳川家康、江戸幕府を開く。	
慶長15年 (1610)	前田利好没する。利家三男知好が七尾城代となる。長谷川等伯、江戸で没する。	
元和元年 (1615)	「一国一城令」が出される。	
元和2年 (1616)	七尾城代前田知好 (利家三男)、京へ上り七尾 (小丸山) 城廃城。	

The ruins of Nanao castle

Nanao castle was a residence of the Hatakeyama clan, who ruled Noto Provinces during the Sengoku period (16th century). The expansive mountain castle had a Honmaru, the main keep, which stood at an elevation of approximately 300m, and a number of Kuruwa (precincts bordered by walls and used for castle facilities, living quarters, etc.) which were located on mountaintop ridges of varying elevations around it.

Due to its scale and fortification, it is one of Japan's Five Greatest Mountain Castles, and is designated as a national historic site.

交通案内



JRで七尾駅まで

- 東 京から/北陸新幹線 (かがやき) 利用で……約3時間30分
- 大 阪から/特急サンダーバード号利用直通で……約3時間20分
- 名古屋から/特急しらさぎ号・能登かがり火号利用で……約3時間50分
- 金 沢から/特急能登かがり火号で……約50分



- ・JR七尾駅～七尾城跡 (本丸北駐車場) 車で約15分 (約7km)
- ・公共交通機関利用
市内循環バス「まりん号」片道約15分
※交通事情により遅れる場合があります。
- 〈行き〉
七尾城ルート順回り: JR七尾駅→七尾城史資料館前 (6～16時台の0分発)
- 〈帰り〉
逆回り: 七尾城史資料館前→ミナ.クル (駅前) (9～16時台の40分発)
- ・七尾城史資料館～七尾城本丸跡まで
徒歩で150分 (往復)

七尾城史資料館

電話 0767-53-4215
古屋敷町シカマ敷 8-2

懐古館

電話 0767-53-6674
古屋敷町夕 8-6

- ・開館時間 午前9時～午後5時
- ・休館日 毎週月曜日、祝日の翌日
冬期休館 12月11日～3月10日
- ・入館料 一般 各館200円 (160円)
大高生 各館160円 (120円)
中学生以下 無料 (団体20名以上)

〒926-8611 石川県七尾市袖ヶ江町イ部 25 番地
七尾市教育委員会文化課 電話 0767-53-8437
メール bunka@city.nanao.lg.jp ファックス 0767-52-5194

●本パンフレットは、平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を受け作成したものです。
発行日 平成27年3月27日

城山展望台
(標高約380m)

七尾城跡
(標高約300m)

百間馬場 P W.C. 展望台駐車場

長屋敷

本丸北駐車場

W.C.

遊佐屋敷

西の丸

九尺石

温井屋敷

二の丸

寺屋敷

樋の水

三の丸

袴腰

安寧寺

沓掛

番所跡

七曲り

時鐘跡

長坂

木(蹴)

落川

小田吉之丈顕彰碑

高屋敷

物構え

大谷川

七尾城史資料館

懐古館

城山

城史資料館前
(まりん号/バス停)

城山総合運動公園

七尾東部中学校

総社

七尾城跡 散策コース

【徒歩で】

A.制覇コース (約150分)

七尾城史資料館 → 沓掛 → 寺屋敷 → 調度丸
→ 本丸 → 二の丸 → 三の丸 → 安寧寺
→ 七尾城史資料館

B.中心部コース (約50分)

本丸北駐車場 → 桜馬場 → 本丸 → 二の丸
→ 三の丸 → 安寧寺 → 樋の水 → 寺屋敷
→ 調度丸 → 本丸北駐車場

天神山小学校

七尾サンライフプラザ

矢田郷公民館

城山登山口

藤野町北

159

本宮神社

石動山
(標高 565m)

やまびこ荘

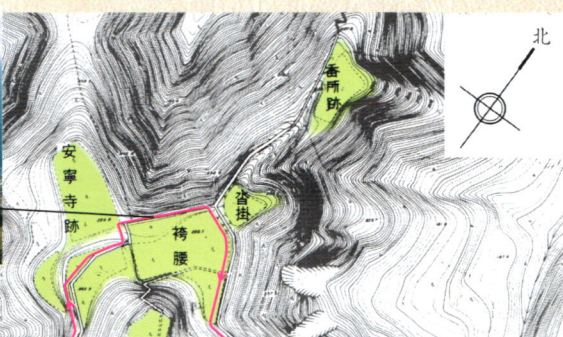
湖畔公園コロサ



七尾城跡 全景 (北西から) — 七尾城跡の範囲



袴腰からの眺望 (七尾市街)



九尺石を含む石垣



桜馬場に向かう階段と石垣



調度丸の石塁



本丸外柵形

七尾城中心部散策コース

(本丸北駐車場 → 本丸 → 二の丸 → 三の丸 → 本丸北駐車場)

所要時間: 50分

七尾城中心部

1. 七尾城跡の概要

七尾城跡は、能登国の守護・畠山氏（1408-1577）が16世紀前半（戦国時代）に築いた城館跡で、全国でも屈指の規模を有します。石動山系に築かれた城域は南北約 2.5km、東西約 0.8km、面積は約 200ha に及び、一帯は「城山」と呼び親しまれています。

山上から山麓までの自然地形を巧みに利用し、七尾の地名の由来となった七つの尾根筋を中心に多数の曲輪（屋敷地）を連ね、山麓には城下の町並みが形成され京風の能登畠山文化が華やぎました。

天正 5 年（1577）の上杉謙信の攻撃によって落城、169 年にわたる畠山氏の領国支配の幕が閉ざされました。落城後の七尾城は、一時、上杉方が入り、その後、天正 9 年（1581）に織田信長から能登一国を与えられた前田利家が入城します。天正 10 年（1582）から 17 年（1589）頃に、港に近い小丸山での新たな築城により、七尾城は城としての機能を失うこととなりました。

2. 遺構の概要

本丸からは七尾湾や能登半島が一望できます。本丸の標高は 305m、城下が 50m で山上と城下の比高差は約 250m あります。

(1) 曲輪

山上から山麓までの尾根筋に多数の曲輪（屋敷地）は、大型の曲輪を中心にいくつかのグループとしてまとめ、曲輪群が集まってできた大規模城郭といえます。本丸を中心とした階層的・求心的な構造であったというよりは、それぞれの曲輪群が半ば独立した分立的な構造といえます。畠山氏をはじめ、^{ぬくい}温井氏、^{ゆさ}遊佐氏、^{ちよう}長氏、^{みやけ}三宅氏などの重臣もそれぞれ屋敷を構え、生活や政治の基盤が山城内にあったことがうかがえます。

(2) 石垣

石垣は自然石を特に加工することなく積み上げる^{のづら}野面積みで築かれ、用いられる石材は、山麓にかけての谷筋の沢からおもに運ばれたとみられます。

石垣の高さが 2m を超える、城内では規模が大きい石垣は、本丸から二の丸にかけての斜面で見られ、段状に石垣が築造されている箇所（本丸北側、桜馬場北側・北西側・南側、温井屋敷西側など）もこれと重なります。

(3) 城下

城下は、山麓の標高約 95 ～ 45m の緩傾斜地に形成されています。現在の古城町と古屋敷町付近一帯にあたり、「蔵屋敷」、「高屋敷」、「大工町」、「鍛冶畑」などの往時の状況を示すとみられる地名や伝承が残り、武家（能登畠山氏の家臣）屋敷や職人の居住域などがあったようです。

(4) 惣構え

古城町と古屋敷町の町境には、東西に延びる高さ 2 ～ 4m の垂直な段差があり、部分的に土塁が確認でき、城の外郭の防衛線の「惣構え」とみられます。惣構えの内側（南側）は、「城戸の内」で武士層の屋敷地、外側（北側）は「城戸の外」で商工業者の居住する町屋域とみられ、鍛冶、鋳物、金工、土師器皿づくりなど職人の居住が考えられます。

(5) 登城路

七尾城へと至る道はいくつかあり、現在、おもに散策できるのは大手道とよばれる旧道で、城下、古屋敷の「門の高」から古城の「高屋敷」を通り、蔵屋敷の西側から山道となり本丸へと至ります。門の南側の発掘調査では、両側に石組みの側溝を備え、路面に小砂利が敷き詰められた（砂利

舗装) 幅約3mの大手道と、道に面し石垣で区画された屋敷地も確認されました。

3. 城の状況

(1) 築城時期

七尾城は能登畠山氏の居城で、能登の政治、文化の拠点として機能しました。築城時期は明確ではありませんが、各地の有力大名がその拠点を山城に移す16世紀前半頃には能登畠山氏も遅れることなく、七尾城を築き支配体制を固めたと考えられます。

府中の守護所(現在の市街地付近)の南西約4kmの石動山系の要害に「七尾城」、その麓に城下町「七尾」を築いて、山上山下が一体となる新しい拠点を形成し、一元的な大名支配を目指しました。こうした能登畠山氏の拠点の移動は、守護大名から戦国大名への変貌を遂げようとした能登畠山氏の変革を物語るものとして位置づけられます。

(2) 戦国時代中頃の七尾城と城下町の様子

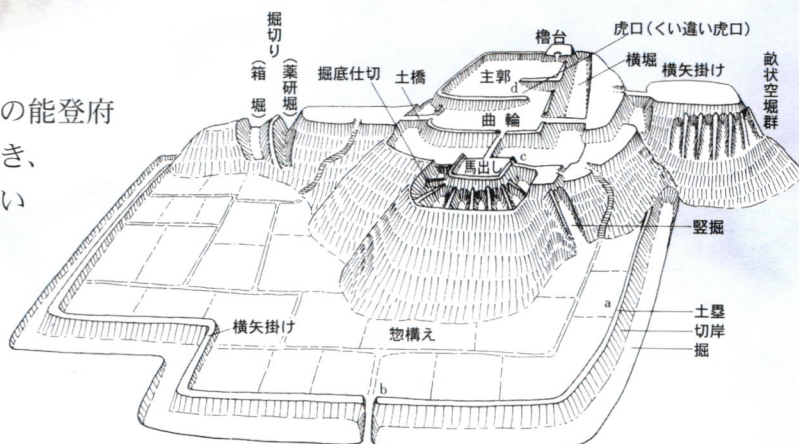
禅僧の^{ほうしゅくしゅせん}彭叔守仙(東福寺の前住持)が天文13年(1544)3月に筆録した『猶如昨夢集』所収の「^{らくてい}独楽亭記」に、当時の七尾城と城下町七尾の様子が描かれています。(彭叔守仙は、天文9年(1540)・10年・16年に^{ぬくいふさだ}温井総貞に招かれて能登へ訪れています。)安定した領国支配を執った7代義総の頃には、山上を「^{てんきゅう}天宮」、城下を「^{さんしせいらん}山市晴嵐」と『独楽亭記』に記されているような繁栄した七尾城下が形成されたようです。

①戦国巨大山城「七尾城」

麓から眺めた七尾城を、「^{たいしゅ}太守(7代義総)の御殿は鳥が翼を張り広げたように建っていて、その建物には華やかに朱や藍が塗り重ねられていることから、まるで空や雲に^{はしこ}梯子を架けたようだ。」と記しています。能登畠山氏の御殿や家臣団の館が立ち並び、まさに七尾城は戦国の巨大山城だったと想像されます。

②「千門万户」の城下町「七尾」

七尾城の麓の城下町・七尾から港付近の能登府中まで、家並みは一里(約4km)余り続き、その様子は「千門万户」とたたえられています。さらに、その町中でいろいろな品物が売られ、多くの人々が行き交い、とても賑やかだと記されています。このような屋敷の痕跡や焼物などの生活用具が、発掘調査で発見されています。



中世城郭鳥瞰図

虎口(平入り虎口)

城郭調査ハンドブック 千田・小島・前川 1993 より転載



惣構え (— 惣構えライン)



城山展望台からの景色 写真 間蔵俊甫

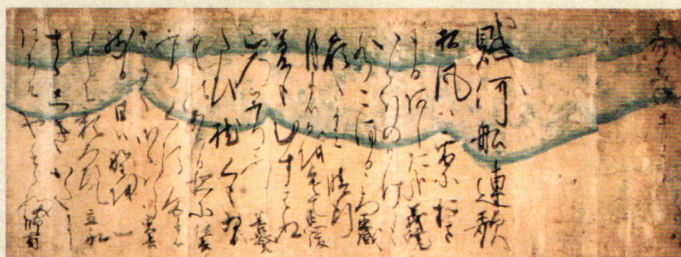
能登畠山氏

足利氏一門の有力武士で、越中の守護を務めていた畠山基国が室町時代の初めの明德2年(1391)に能登の守護に任命され、その後、河内、紀伊の守護も兼務しました。応永5年(1398)には室町幕府の管領に起用され、斯波氏・細川氏と三管領の一つとしての地位を築いています。

能登畠山氏は、基国の次男・満慶が、治めていた四か国(河内・越中・紀伊・能登)のうち、応永15年(1408)に能登国のみの守護となったことをはじめとします。当時、守護は在京し、領国では守護代の遊佐氏が府中の守護所(現在の市街地付近)で政務にあたっていました。

応仁・文明の乱(1467-1477)後の文明10年(1478)に、守護・畠山義統が能登に下向、在国し分国経営の基礎を固めました。7代義総のとき、領国支配は安定し、公家や歌人などの多くの文化人が、都から七尾に訪れました。府中の義統邸や七尾城内の義総邸では、たびたび和歌や連歌の会が催されました。

義統が発句する「賦何船連歌」をはじめ、能登畠山氏の文芸活動うかがわれる3巻の連歌集が今に残されている。



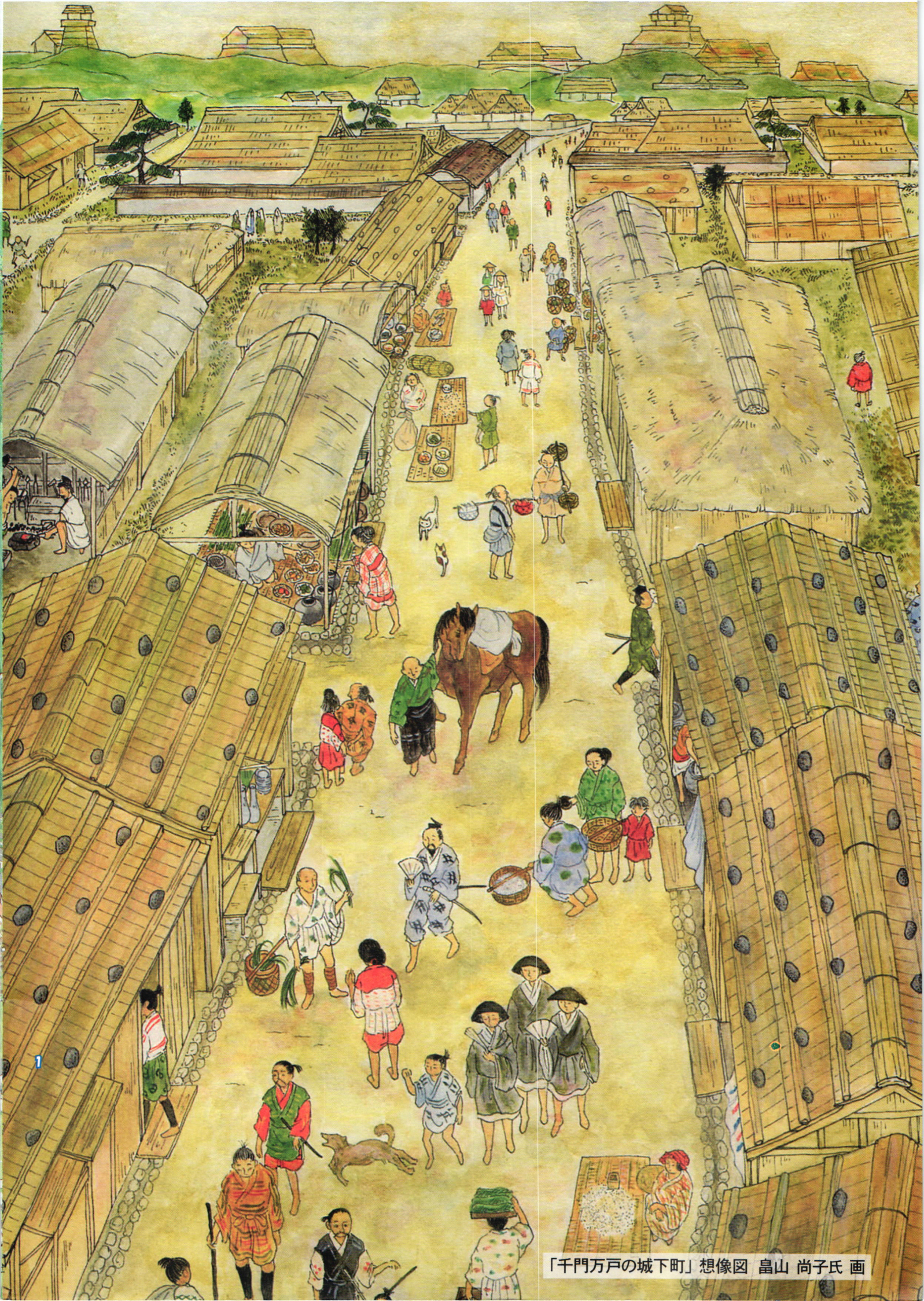
賦何船連歌集 文明15年(1483) 県指定文化財 七尾市蔵



七代 義総画像 複製 七尾市蔵



七尾城下町シッケ地区遺跡出土土器



「千門万戸の城下町」想像図 畠山 尚子氏 画